一八二　由緒書

由緒書

京都町奉行支配
御茶師
上林春松

由緒書

京都町奉行所支配
御茶師
本国丹波
生国山城
養子
上林春松
未歳四十四

文恭院様御代文政七申年十一月養父春松跡相続被仰付、同八酉年四月廿八日西町奉行於（付箋）「所司代御闕中ニ付西町奉行於御役宅ニ被仰付候事」御役宅、町奉行牧備後守・須田大隅守・御目附伊奈熊蔵・高山真次郎・御数寄屋頭村田恵斎御立会ニ而誓詞被仰付、如養父時御召方御茶御用相勤、公方様・右大将様江毎年為年頭御祝儀御茶筌五本入一箱宛、公方様江毎年五月御夏切御茶一壷献上仕、毎年御茶袋紙五拾枚拝領仕、未年迄二十四年相勤罷在候

一　京都町奉行支配
御茶師見習
上林春佐
未歳十一

弘化四未年五月見習被仰付相勤罷在候

一先祖（初代）　上林春松
宇治ニ而御茶仕立罷在候処、権現様御代年月不知御茶御用被仰付相勤江府江参上仕、年月日不知御柄杓拾本入献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、慶長九辰年九月十一日病死仕候

一先祖（二代）　上林春松
台徳院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤江府江参上仕、年月不知御柄杓拾本献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、元和五未年十二月十三日病死仕候

一先祖（三代）　上林春松
大猷院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、年月不知御柄杓拾本入献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、寛文十一亥年正月廿四日病死仕候

一先祖（四代）　上林春松
常憲院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤江府江参上仕、年月不知於御白書院御納戸構御柄杓拾本献上、御目見仕、年月不知於躑躅間若年寄衆御姓名不知被仰渡御暇被下置金壱枚頂戴仕、宝永三戌年六月廿三日病死仕候

一先祖（五代）　上林春松
文昭院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、寛保二戌年三月奉願隠居仕罷在候

一高祖父（六代）　上林春松
有徳院様御代年月不知父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、延享四卯年十月廿五日病死仕候

一曽祖父（七代）　上林春松

惇信院様御代延享五辰年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、寛政四子年十月奉願隠居仕罷在候

上林春松

一祖父（八代）

文恭院様御代寛政四子年十月父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、文政四巳年五月奉願隠居仕罷在候

上林春松

一養父（九代）

文恭院（家斉）様御代文政四巳年五月父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、同七申年十一月奉願隠居仕罷在候

一祖父養父私遠慮逼塞閉門等都而御咎之儀無御座候、以上

弘化四未年十二月　　上林春松

二三一　公儀書上由緒書并親類書　尾州書上由緒　阿州書上由緒書

（前略）

由緒書

京都町奉行所支配

本国　丹波　　御茶師

生国　山城　　実子

上林春松

亥歳二十八

温恭院様（家定）御代安政五午年二月父春松跡相続被仰付、同年五月十二日所司代於御役宅、本多美濃守殿・町奉行浅野和泉守・岡部備後守・御目附城隼人・平岡鐘之助・御数寄屋頭野村休成立会ニ而誓詞被仰付、如父時御召方御茶御用相勤、公方様・右大将様江毎年為年頭御祝儀御茶筌五本入一箱宛、公方様江毎年五月御夏切御茶壱壷献上仕、毎年御茶袋紙五拾枚拝領仕、亥年迄六年相勤罷在候

上林春松

一先祖（初代）

（枠囲み）

清和源氏多田満仲より出、丹波国住人赤井又二郎基家之後統上林加賀守入道宗印三男権之祐儀剃髪仕春松与改、御茶仕立罷在候処

宇治二而御茶仕立罷在候処

権現様御代年月不知御茶御用被仰付相勤江府江参上仕、年月日不知御柄杓拾本入献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、慶長九辰年九月十一日病死仕候

上林春松

一先祖（二代）

台徳院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤江府江参上仕、年月不知御柄杓拾本入献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、元和五未年十二月十三日病死仕候

上林春松

一先祖（三代）

大猷院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、年月不知御柄杓拾本入献上、御目見仕、御暇之節金壱枚頂戴仕、寛文十一亥年正月廿四日病死仕候

上林春松

一先祖（四代）

常憲院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤江府江参上仕、年月不知於御白書院御納戸搆御柄杓拾本入献上、御目見仕、年月不知於躑躅間若年寄衆御姓名不知被仰渡御暇被下置金壱枚頂戴仕、宝永三戌六月廿三日病死仕候

上林春松

一先祖（五代）

文昭院様御代年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、寛保二戌年三月奉願隠居仕、同三亥年七月廿五日病死仕候

上林春松

一先祖（六代）

有徳院様御代年月不知父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、延享四卯年十月廿五日病死仕候

一高祖父（七代）　上林春松

惇信院様御代延享五辰年月不知養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、寛政四子年十月奉願隠居仕、同五丑年十二月廿八日病死仕候

一曽祖父（八代）　上林春松

文恭院様御代寛政四子年十月父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、文政四巳年五月奉願隠居仕、文久二戌年十月廿七日病死仕候

一祖父（九代）　上林春松

文恭院様御代文政四巳年五月父春松跡相続被仰付、如父時御用相勤、同七申年十一月奉願隠居仕、文久二戌年十月廿九日病死仕候

一父（十代）　上林春松

文恭院様御代文政七申年十一月養父春松跡相続被仰付、如養父時御用相勤、安政五午年二月奉願隠居仕、文久二戌年十月廿八日病死仕候

一祖父父私遠慮逼塞閉門等都而御咎之儀無御座候、以上

上林春松

親類書

本国　丹波　　京都町奉行所支配

生国　山城　　御茶師

実子

上林春松

申歳二十五

権現様御代先祖春松初而御茶御用被仰付、代々相勤、父春松安政五午年二月隠居仕、私儀跡相続仕、御茶御用不相替被仰付、相勤罷在候

一祖父　上林春退死

一祖母　無御座候

一父　上林松翁死

一母　松平豊前守家来　小沢太郎右衛門死姉死

遠縁類

一　上林味卜

一　上林平入

一　酒多宗有

一　星野宗以

一　堀　左近

右之通御座候以上

慶応元丑年十月

上林春松

（後略）

宇治郷および宇治茶関係記録について

〇九四「宇治記」・**二六四**「宇治里袋」・**三四二**「茶ノ沿革」を翻刻紹介する。いずれも宇治郷および宇治茶に関してまとめられたもので、これまでにもその内容は『宇治市史』等で利用されてはきたが、全面的な紹介は今回が初めてである。

いずれも罫紙に墨で筆写されている。前二者の罫紙は同版だが製造者は不明、「茶ノ沿革」の罫紙にのみ欄外に「寺四南井上製」と刷り込まれている。前二者は、その内容および注記から、上林六郎家（代官・宇治茶頭取）に伝来した物を明治期に写したと見られる。「茶ノ沿革」にはまったく注記が付されないが、内容から明治維新後、新政府あるいは京都府に提出したものであろう。

前二者は、上林春松家一一代秀利・松好の筆写にかかる。前項で紹介された由緒書類も彼がまとめたものである。後者も成立時期・筆跡から同人の手になる可能性が高い。彼が、幕末から明治初期にかけて、変動のいちじるしい時代に、宇治郷・茶そして自家の歴史を後世に伝えるべく危機感を持って、これら史料の収集・筆写にあたったことは想像に難くない。

なお、編集上「宇治記」各項目の表題上部に〇を付した。「茶ノ沿革」の翻刻文の＜＞は割注をしめす。また〇〇は史料のママで、筆写時に判読できなかったようである。

〇九四　宇治記

（朱筆）
「此帳面文化十酉年閏十一月十九日西御
役所当番方与力下田菅五郎へ相渡ス、
御使中村弥右衛門ト書付有之事」
宇　治　記

上林松好　写之

〇宇治町数家数人数并寺社数宇治川往来船之事

一宇治郷と相唱申候本字菟道と認申候
　但領庄之名無御座候
一宇治郷之儀者御茶御用人足相勤候ニ付国並夫役慶長年中より御免除ニ御座候、右御免除之御朱印上林六郎方ニ御座候
　但宇治近村・小倉村・寺田村・白川村・池尾村・高尾村・江津村之儀者付雇之村々と相唱へ、右御用人足宇治郷同様相勤候ニ付、国並夫役等宇治郷同様御免除ニ御座候
一宇治郷　東西弐拾九町　南北弐拾四町
一宇治町数　弐拾六町　外弐町煙亡穢多弐町亡所ニ成
一高　（原文空白）
一家数　四百九拾七軒
　内四百六拾五軒　家持
　　三拾弐軒　借家

一人数　弐千八拾八人
内千百弐人　男
九百八拾六人　女
外
煙亡　家数弐軒　家持
人数七人　内三人男
四人女
穢多家数拾七軒　内拾五軒家持
弐軒借家　人数八拾壱人　内三十九人男
四十弐人女
一宇治橋　長八拾三間四尺
幅三間
一寺数　拾弐ケ寺
一惣堂　七ケ所
一社数　拾弐社
内　橋姫社壱ケ所者御普請所

○宇治川往来船

一六艘　淀過書座持
但宇治浜より伏見迄御用船賃銀三匁、売買船賃四匁、格別御用之節者淀過書座年寄江申置、早速船差登せ候事
一入屋形船　壱艘　加子四人乗
但淀より宇治迄差登下り斗船賃銀八匁八分
一高天船　壱艘　加子三人乗
但右同断　船賃銀七匁弐分
一平天船　壱艘　加子弐人乗
但右同断　船賃銀五匁六分
一小船　拾六艘
是ハ宇治郷百姓之内所持仕、屎等運送仕来り候

○同所御茶方之次第

一　御代官
御茶御用方
上林六郎
見習
一　上林永二郎
御茶御用方
一　上林又兵衛
右六郎・又兵衛両人御茶御用方一切引請相勤、年番掛り二而取扱候、三仲ケ間御茶師之儀者、慶長以前より六郎先代之支配仕来り候処、享保年中より六郎・又兵衛両人二而支配仕候、尤御茶師共身分者京都町奉行支配、御茶方之儀者六郎・又兵衛両人支配仕候

○御物御壷御銘

福海御壷　半弐拾　御詰六斤
日暮御壷　半弐拾　御詰五斤三
袖狭御壷　半弐拾　御詰五斤
志賀御壷　半弐拾　御詰五斤半
旅衣御壷　半弐拾　御詰三斤六
寅申御壷　半弐拾　御詰六斤三
藤瘤御壷　半弐拾　御詰四斤五
埋木御壷　半弐拾　御詰五斤半
太郎五郎御壷　半弐拾　御詰三斤八
虹御壷　半弐拾　御詰五斤五

右御壷之内、年々御壷三ツ宛御登ニ相成、弐ツ者六郎・又兵衛、壱ツハ御物御茶師拾壱人廻リニ被仰付候事

○年番之方御用之覚

一御物御壷　御銘不定　斤数
一西丸御召新御壷　半弐拾　御詰三斤半　二壷
一禁裏御進献新御壷　半弐拾　御詰三斤
一東宮御進献新御壷　半弐拾　御詰三斤
一日光御宮新御壷　半弐拾　御詰五斤
一久能御宮新御壷　半弐拾　御詰四斤九
一紅葉御宮新御壷　半六　御詰三斤六
一日光御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤
一御簾中様新御壷　半弐拾　御詰三斤半

〆拾壷

右御壷壱ツ黄金壱枚宛被下置候

一京都被進新御壷　半六　御詰壱斤半
一御夏切新御壷　半五　御詰弐斤　弐壷
一極昔御茶　三拾斤　但　六斤入　壱壷　五斤入　四壷　四斤入　壱壷
一折鷹御煎茶　六拾壱斤半　但　五斤入　拾壱壷　三斤半入　壱壷　三斤入　壱壷

右極昔御茶・折鷹御煎茶ハ年々斤数増減御座候

外　献上御試御壷　壱壷　但　半三　御詰弐斤
献上御茶湯御壷　拾壷　但　半壱　御詰

右御壷拾壱壷ハ毎年献上仕候

右之通年番之方詰上申候

○非番之方御用之覚

一御物御壷　御銘不定　斤数
一西丸御召新御壷　半弐拾　御詰三斤半
一仙洞御進献新御壷　半弐拾　御詰三斤
一上野御霊前新御壷　半弐拾　御詰三斤七
一上野御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤半
一増上寺御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤半　二壷
一御台様新御壷　半弐拾　御詰三斤半
一□姫若様新御壷　半弐拾　御詰三斤半

〆九壷

右御壷壱ツ付黄金壱枚宛被下置候事

一御夏切新御壷　半五　御詰弐斤
一極昔御茶　拾九斤　但　五斤入　壱壷　四斤入　弐壷　三斤入　弐壷
一折鷹御煎茶五拾弐斤　但　六斤入　弐壷　五斤入　七壷　四斤入　壱壷

右極昔御茶折鷹御煎茶ハ年々斤数増減御座候

外　献上御試御壷　壱壷　半三　御詰弐斤
献上御茶湯御壷　拾壷　半壱　御詰

右御壷拾壱壷ハ毎年献上仕候

右之通非番之方詰上申候

上林六郎御茶方御用掛家来
中村弥右衛門
平尾十兵衛
吉井太郎左衛門
上林又兵衛御茶方御用掛家来
西川勘次
小山市郎
右之者御茶御用向取扱仕候ニ付、御通御茶御用被仰付候

○三仲ケ間御茶師之訳

御物御茶師拾壱人名前
上林味卜
上林春松
上林平入
長井貞甫
酒多宗有
尾崎坊有庵
星野宗以
上林三入
堀　真朔
長茶宗味
辻　善徳
右之者御物御壷順番ニ被仰付候ニ付、御物御茶師卜唱申候

一御物御壷　御銘不定　壱壷
一御召新御壷　半弐拾　御詰三斤半　八壷
一上野御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤半　弐壷

〆拾壱斤

右之御壷御物御茶師拾壱人江廻りニ被仰付、黄金壱枚宛被下置候
一上野御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤半　上林味卜
一増上寺御霊屋新御壷　半弐拾　御詰三斤半　上林三入
右之御壷前々より右両人へ被仰付、黄金壱枚宛被下置候
一増上寺御霊屋新御壷　半十五　御詰拾弐斤半　星野宗以
右之御壷御霊屋御用ニ付御物御壷列ニ御座候得共、黄金詰ニ而ハ無御座、価詰ニ被仰付、前々より星野宗以詰上来り申候
一日光御門跡新御壷　半弐拾　御詰四斤半　壱壷
一御献備御用新御壷　半五拾　御詰弐斤　壱壷
右御壷価詰
右二口之御壷者年々罷登り候、御数寄屋頭宇治逗留中宿之儀、右拾壱人廻りニ宿相勤候ニ付、右宿番之者へ被仰付候
一別儀御茶　五斤入　拾壱壷
西丸御用
一別儀御茶　五斤入　弐壷
同
一別儀御茶　四斤入　弐壷
右別儀御茶御物御茶師拾壱人江被仰付候

外

一献上御夏切御壷　拾壱壷　但　半三　御詰弐斤

右御物御茶師拾壱人より毎年献上仕候

御袋茶御茶師九人

上林牛加

（朱筆）「祝甚兵衛当時無之」　祝　甚兵衛

八嶋宗応

上林道庵

堀　正法

木村宗二

竹田紹旦

佐野道意

竹多道雲

竹田紹清

一献上御茶　半弐袋宛　右九人より

但紅葉山御宮御壷江半弐袋宛不残詰加献上仕候ニ付、御袋御茶師与唱申候

一御通御壷　九壷　但　極揃御茶　五斤入

西丸御用

一御通御壷　弐壷　但　前同断　五斤入

右御壷御袋御茶師九人江被仰付候

御通御茶師十四人「三ニ相成」（朱筆）

片岡道二

西村了以

（朱筆）「当時御袋茶師ニ成ル」

竹田紹清

河村宗順

橋本玄可

馬場宗円

森本道加

喜多立玄

菱木宗見

宮林有斎

新　長左衛門

梅林宗雪

森江宗左衛門

永田七郎右衛門

一御通御壷　拾九壷　但　極揃御茶　六斤入三壷　同　五斤入十一壷　四斤入五壷

西丸御用

一御通御壷　弐壷　但　極揃御茶　四斤入

臨時御用

一御通御壷　四壷　但　極揃御茶　三斤入

右御壷御通御茶師十九人江廻り二被仰付候

但御壷江銘々より極上半弐袋ツゝ詰□献上仕候

一御通御壷　弐壷　但極揃御茶　五斤入　喜多川太郎右衛門　藤科金兵衛

此者両人儀、太郎右衛門ハ上林三入下代、金兵衛ハ星野宗以下代ニ而、別席ニ御座候、右下代ニ而御通御茶御用被仰付候ハ、前々ハ上林味卜・星野宗以・上林三入三軒ニ而御数寄屋頭宿持切り相勤候ニ

付、下代右宿用骨折候義ニ付、右御用御数寄屋頭申付候ニ付、右仕来り当時ニ而も被仰付候

右両人ハ御通御茶師ニ而ハ無御座、仲ケ間外席ニ御座候得共、右御壷両人江壱壷ツゝ被仰付候、尤仲ケ間外ニ御座候間、御茶目録も右両人ハ別目録ニ而都而御帳面類も別ニ認申候

御物御茶師仲ケ間　拾壱人
一御袋御茶師仲ケ間　九人　　都合三拾四人
御通御茶師仲ケ間　拾四人

右之外ニ平茶師与相唱申候者名前

善之丞　山上
善太夫　山上
三郎助　梅林
三郎兵衛　森江
長兵衛　宮林
吉治郎　新
嘉兵衛　松尾

右者平茶師与相唱、御用向ハ相勤不申候得共、先前より作茶製仕三御茶師へ随順仕罷在候、御茶至而凶作又者非常等之節、右平茶師作仕候茶を宇治表へ引取精製仕、末々御用ニ相立申候用意ト申伝候

（朱筆）

「文化十二年亥八月二日御控茶師与申名目御数寄屋頭より御免ニ而当時御控茶師

山上善之丞　山上善太夫　松尾喜八　森江長兵衛
梅林三郎助　宮林三郎兵衛　新吉次郎　〆七人」

○禁裏仙洞御茶壺之事

禁裏御所御物

一延命御壷　半拾五　御詰三斤半　上林六郎
一石上御壷　半弐拾五　御詰五斤　上林又兵衛
右隔年ニ被仰付候
一細谷川御壷　半拾　御詰五斤半　星野宗以
右毎年被仰付候
一嶋津御壷　半弐拾五　御詰六斤半　上林三入
一無銘御壷　半拾五　御詰四斤七　木村宗二
右隔年ニ被仰付候
東宮御方江被為付候御物
一縁御壷　半拾　御詰二斤半　星野宗以
右毎年被仰付候
右者御壷壱ツニ付黄金壱枚宛
一別儀御茶　八斤入壱壷　尾崎坊有庵
一同断　五斤入壱壷　右同人
一同断　三斤入壱壷　上林三入
一同断　三斤入壱壷　木村宗二
右者毎年被仰付候

仙洞御所御物

一玉簾御壷　半弐拾五　御詰四斤壱　星野宗以

右者毎年被仰付候

一松枝御壷　半弐拾五　御詰三斤半　上林又兵衛

一八尾御壷　半弐拾五　御詰三斤壱　尾崎坊有庵

一無銘御壷　半拾五　御詰壱斤壱　上林三入

右御壷三ツ三ケ年廻りニ被仰付候

右者御壷壱ツニ付黄金壱枚宛

一別儀御茶　五斤入壱壷　木村宗二

右者毎年被仰付候

右　禁裏　仙洞御所御壷一緒ニ被仰付、御取次之内両人御膳番之内両人宇治江罷越候事

関東御壷宇治御出行相済候而星野宗以より京都江御案内申上、其後日限等被仰出御壷宗以宅江御着、銘々相渡御茶詰上宗以方江御壷不残相揃当日御所江上り候

○御茶壷蔵之事

一御茶壷蔵惣構　東西拾五間　南北弐拾壱間半

一御土蔵　壱ケ所　桁行三間　梁行三間　瓦葺

内ニ御清所仕切有

一廂　壱間　弐間

一御番所　桁行拾間　梁行三間　屋根柿葺

一廂　壱間　弐間

一御露次之者居小屋　桁行拾間　梁行三間　屋根並瓦葺

右居小屋上林又兵衛屋敷内ニ有之候

右御壷蔵者上林六郎・上林又兵衛両人隔年ニ年番之方預り申候

文化十酉年十一月

○宇治本郷高之事

一高三千百三拾石五斗壱升九合四夕　寛永十三子年迄

内百拾九石八斗壱升　宇治本郷高屋地子御赦免

残高三千拾石七斗九合四夕

此取米四百五拾八石九斗五升五合

右者御茶師より致訴訟候ニ付、寛永十一戌年御物成高弐千五百八拾八石八斗九升六合之半納ニ寛永十三子年ニ被仰付、同年より元禄十五午年迄年々如斯致上納候、尤新開荒地引高等付少宛之増減御座候

一高三千拾石七斗九合四夕　宇治郷高

内　田畑高千六拾壱石八斗四升七合五夕

薗屋敷千九百四拾五石八斗七合九夕

外薗高三石五升四合

斗代

上薗壱反ニ付　弐石五斗代

今植壱反ニ付　弐石

中薗壱反ニ付　壱石五斗代